

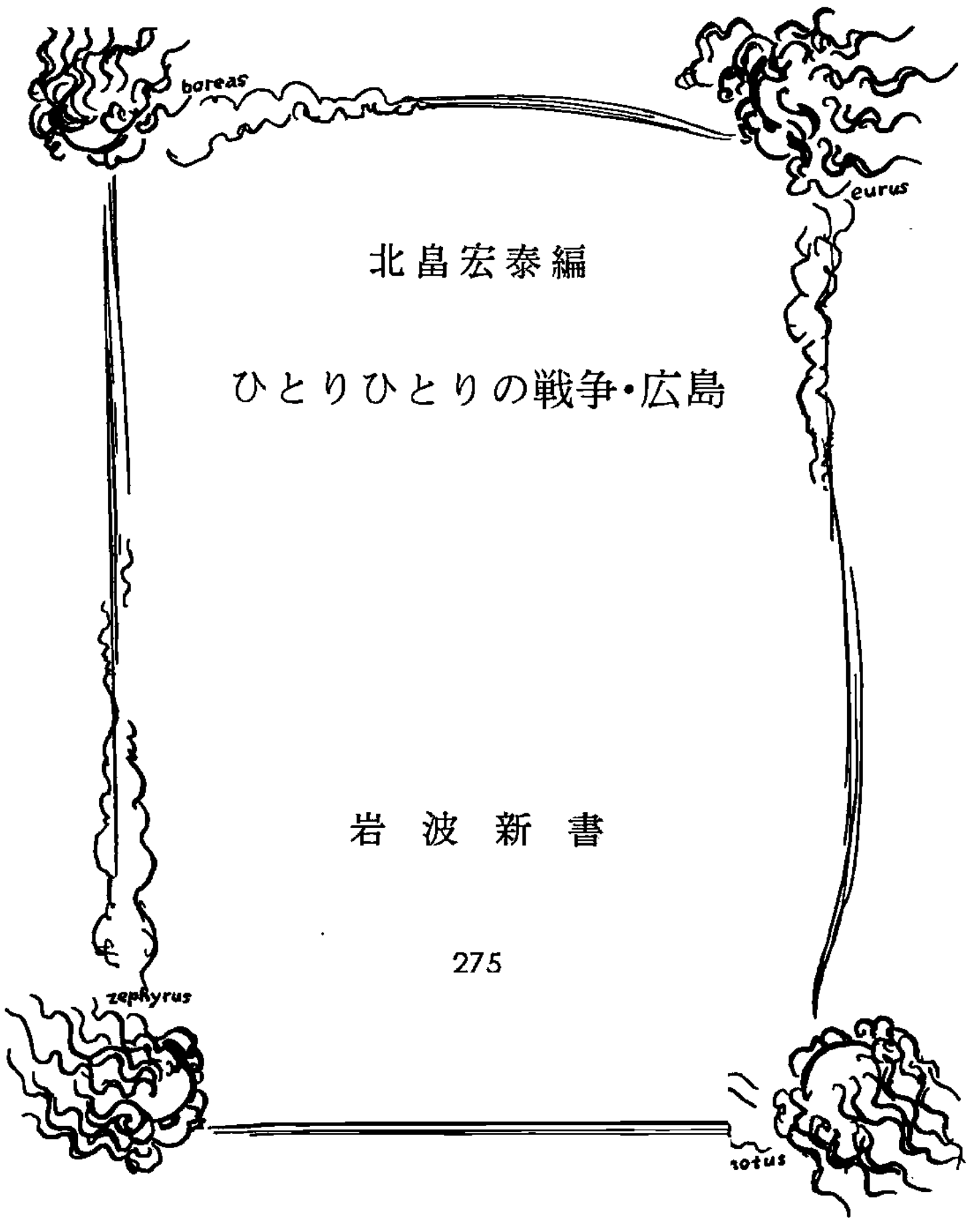
北 畠 宏 泰 編

ひとりひとりの戦争・広島



岩 波 新 書

275



北 畠 宏 泰 編

ひとりひとりの戦争・広島

岩 波 新 書

275

北畠宏泰

1944年和歌山県に生まれる

1968年早稲田大学政経学部卒業，朝日新聞
社入社。大阪本社学芸部，同社会部，
広島支局などを経て，1984年8月よ
り大阪本社社会部勤務

ひとりひとりの戦争・広島

岩波新書(黄版) 275

1984年8月20日 第1刷発行

定価 430 円

編 者 きた ばたけ ひろ やす
 北 畠 宏 泰

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・永井製本

© Asahi Simbun-sha 1984

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

まえがき

広島原爆病院の小さな資料室の一角、ガラスケースの中に、一体の骨格標本がある。二十二年前、七十八歳で死亡した男性被爆者のこの標本は、骨の中からにじみ出る脂肪の油滴を、いまでも両足の指先からポトツ、ポトツとしたたらせている。月二回、布でそれをそっとふき取るのが、病院職員の仕事である――。

デルタの街・広島のはぼ中央部、爆心直下の原爆ドームから南約一・六キロに、広島原爆病院はある。この被爆者専門病院の入院患者、いま約百六十人。平均年齢七十一歳。高齢化が著しい。平均在院日数約百日。他の医療機関より、その日数はきわだって長い。

広島に原爆が投下された一九四五年以降、治療を受けた全被爆者の膨大なカルテが保存されている。カルテは通常五年で廃棄されるが、ここは永久に保存する。解剖された被爆者、二千数百人の臓器もホルマリン容器に密封されて、標本室の棚に整然と並ぶ。これも

永久保存である。

原爆は、今日の医学ではなお解明しきれない放射線障害を人間に与えた。被爆後三十九年たったいまも、被爆者はさまざまな原爆後障害に悩まされ、不意に訪れる原爆症への不安、「いまに続く原爆死」への恐怖にさらされている。カルテ、臓器の永久保存は、今後、起きるかも知れない、予測不能な事態に備えての集積なのである。

米軍戦略爆撃機B 29「エノラ・ゲイ」が投下した全長三メートル、直径七十一センチ、重さ四トンのウラニウム爆弾「リトル・ボーイ」は、軍事・重工業の一大拠点、軍都・広島を瞬時に壊滅させた。戦闘員、非戦闘員、老人、婦人、子どもの区別なく、無差別大量殺傷した原爆は、生命、人権、家屋や財産、職場、近隣などの社会関係、この土地がはぐくんできた文化、人と人との絆のすべてを崩壊させた。当時の人口、約三十六万人。うち、被爆後四カ月の間に十四万人（誤差一万人）が死亡したとされる。しかし、その実数は、現在もなお、推定の域を出ない。行政機関の戸籍簿など一切が焼失し、追跡が不可能なためである。市内約七万六千戸の住宅は、うち五万五千戸が全焼。そして、長崎では四カ月の間に、約七万人が同じ原爆症の犠牲になったとされている。

原爆は、人に「むごい死」と「むごい生」を強いた。生き残った被爆者も、多くは放射線障害による生活能力の喪失、家族の崩壊、結婚、就職などの差別……、肉体的、精神的、経済的——あらゆる側面で、痛苦の犠牲を払わされてきたのである。

最近、その被爆者の中に、被爆体験をはさむ自分の戦前、戦後を、堰を切ったように語り始めた人が増えている。全国各地から広島を訪れる修学旅行生は年々増加し、その生徒たちに余命いくばくもない老被爆者らが、精魂込めて、時には衝動的に証言を繰り返す。

現在、地球上にある核兵器は広島型原爆に換算して約百万発分といわれる。しかしなお、軍縮は進まず、世界を覆う核は増殖の一途である。被爆者が自分の体験をつぶやきのよう

に話し始める時、そこには「人間を取り戻そう」という熱い思いが込められている。

本書には、広島で被爆した、そんな六人の方々の証言を収録した。被爆後、韓国へ渡り、辛酸をなめた原爆孤児。原爆に遭い、また有機水銀に体を蝕ばまれた被爆者、水俣病患者。軍国主義下、軍部の学問・思想・宗教弾圧のもとでさまざまな迫害を受けたミッションスクールの元女教師。戦争・原爆で消えた神楽の復興に立ち上がった村人の話。そして、半生を被爆者の看護にささげた被爆者看護婦と、広島刑務所で被爆し、戦争・原爆という

「犯罪」を初めて語り始めた元受刑者——。生いたちから被爆体験、それに続くそれぞれの個人史には、まさに、一人ひとりの「ヒロシマ」があった。しかし、この証言記録は、決して突出した、特異な体験ばかりを選んだのではない。全国の被爆者約三十六万八千人。潜在被爆者を含めると、その数はさらに膨脹する。その一人ひとりに、程度の差はあっても、厳しい「三十九年」があったはずである。

「原爆」は続いている——。

本書は昨年十月から今年六月まで、『朝日新聞』広島版に「ひとりひとりの戦争・ヒロシマ」と題して、計五十九回にわたって連載したシリーズに加筆し、一冊にまとめたものである。出版に当たり快諾して下さった六人の証言者の方々、新聞連載中、多くの激励や助言をいただいた被爆者の皆さん、市民・平和団体などの方々、フリーライターの吉野健・みどりさん、デスク担当の内海紀雄、斎藤忠臣両氏、それに同僚に心から感謝する。また編集、出版にご尽力下さった岩波書店の坂巻克巳氏にお礼を申し上げます。

一九八四年六月

目次

まえがき

1 長い旅……………友田典弘さん……………一

- その日、何もかもが消滅した (三)
顔見知りの朝鮮人と出会って (五)
「絶対、日本語をしゃべるな」 (八)
毛布一枚抱えて家出 (二〇)
朝鮮戦争——再びソウルへ (二四)
靴磨き、パン屋……と転々 (二六)
「日本へ帰る」を支えに (二九)
祖母が写真を確認 (三三)
大阪へ——韓国人経営の職場に (三四)

原爆の犠牲者なんやなあ (二七)

2 二冊の手帳……………山下明さん……………三

東京へ出て絵を学ぶ (三三)

満州で倒れ、病院から病院へ (三五)

キノコ雲、黒か雨 (三八)

戦死者たちの肖像画を (四二)

チッソの関連職場へ (四四)

六歳の長男も水俣病で…………… (四七)

「証拠がなか」の一点ばり (五〇)

水銀は魂まで溶かす (五三)

寿命ある限り話し続ける (五六)

3 受難のとき……………芝間タツさん……………六

みんな幽霊みたいに歩いた (六三)

強まるキリスト教への風当たり (六六)

4 神 楽 の 里 …………… 結城俊男さん …… 八九

「スパイ学校」といううわさ (六九)

「女学院移転反対」の住民大会 (七二)

教室へ石——退学者が続出 (七四)

外人教師全員、ついに本国へ (七七)

遺骨は外交文書の中に隠して (八〇)

「勤労働員」の日々 (八三)

庶民が庶民を追い込んでいった (八五)

悠長・素朴な片田舎 (九二)

二百年前、村の平穏を祈って (九三)

灯火管制——練習が不可能に (九五)

村は修羅場になった (九六)

軍隊はなんでも勝手に…… (一〇〇)

枕崎台風に襲われて (一〇三)

「わしらには神楽がある」 (一〇五)

いつまでも神楽バカで…… (一〇八)

5 灼けた白衣……………久保文子さん……………二

看護婦として佐世保へ(二三)

夜遅くまで働きづめ(二五)

夫は「壮烈ナル戦死」(二八)

無数のガラス片が顔に(三〇)

「それでも帝国軍人かね！」(三三)

家族全員、無事な姿で(三五)

患者さんたちの境遇(三八)

部屋の花はきれいでも……(三一)

被爆者に慕われた重藤先生(三四)

つらいことを見過ぎた(三六)

戦争と原爆に振り回されて(三九)

6 囚われの被爆記……………小倉醇さん……………二四

十六の時に家出して(二五)

紀元節の日、自殺図る(二八)

くり返す刑務所暮らし (二五)

声をかけ合い、柱をどけて (二六)

「刑務所が一番安全じゃ」 (二六)

脱獄——まっすぐ北へ走った (二六)

「自分こそが寄る辺」 (二六)

高校生たちは身を乗り出して (二七)

証言の記録を急がねばならない……………北畠宏泰……………二九

最初の原爆手記——筆者たちのその後／「個人史」

の記録を重ねて／「さみしくなったら、これを見

る」／震える手、もつれる舌で／女学院への迫害／

闇の中に浮かぶ拝殿で／四十年間、亡夫の声を聞き

ながら／重い口を開いた元受刑者／高揚した反核・

平和運動／「何もしないことができる」

Ⅱ 長い 旅



友田典弘さん(48歳)

大阪市城東区在住

広島で原爆孤児になった少年は、被爆間もなく対馬海峡を越え、韓国へ渡る。異国での生活は苛酷だった。やがて朝鮮戦争。戦火の中を逃げまどい、辛酸をなめる。日本への思い絶ちがたく、やっと帰国できたとき、少年は二十四歳になっていた。しかし、その時、覚えていた日本語は「おはよう」と「さようなら」の二つだけであった。日本、韓国。二つの国で混乱と激動の「二つの戦後」を生きねばならなかったこの人に、流転の「自分史」を語ってもらう。



弟 と

その日、何もかもが消滅した

何から話せばいいのやら。実際、いろいろありすぎたですから……。まあ、順を追うて、原爆の前のことからお話しましょうか。

わたしの家はいまの平和記念公園のすぐ近くで、元安川の東側、川沿いの大手町にありました。おやじは多市^{たいち}、おふくろはタツヨ、二つ違いの弟は幸生^{ゆきお}といいました。おやじは

職業軍人だったのか、その辺がよう記憶にないんですが、呉の海軍に行っとして、わたしが袋町国民学校二年のとき、病気で亡くなったです。優しい人でした。確か、そのしばらく後だったか、建物疎開（空襲火災の延焼防止のために強制された建物破壊）やいうて、わたしの家も壊されました。柱にロープかけて、二、三十人ほどが、あっちからも

こっちからも引っ張ると、ズドーンと倒れよったのを、よう覚えとります。

引っ越した先は、そこから小道を何本かはさんだごく近所、やはり同じ大手町で、当時としてはモダンなコンクリート造りの二階建てだったです。なんでも、おやじがわりと財産を持つとったそうで、あのころにしては家族三人の生活は、ゆったりしとったような気がします。おやじが死んでからは、おふくろが洋服の仕立屋みたいなことをしておりまして。時どき、弟とわたしを元安川へボートに乘りに連れていってくれたです。

あれは四年生になって間もなく、昭和二十年だったと思います。学童疎開が始まりました。場所はどこだったか、県内の田舎のお寺へわたしも三、四十人の同級生と行きました。本堂に布団を敷いて、朝は五時ごろ起きてラジオ体操とか駆け足訓練をして。ご飯は毎日、ほんのちょっとで、大豆やジャガイモが入っとして。イナゴがおかずでした。

いまでいう「過保護」というやつだったんでしょう、家族と離れてさみしいし、それにわたしはイナゴがいやで——もつとも、あれを好きという者はだれもおらんが——、しばらくして体の具合が悪いと「芝居」して、先生だまして、おふくろに広島へ連れ帰ってもらった。そんなこんなうちに、間もなく八月六日を迎えるわけです。

あと何日かで夏休みに入るといふときでした。あの朝、わたしは寝坊したのか遅刻して、一目散に学校へ駆け込んだ。鉄筋校舎の地下が靴脱ぎ場になって、靴をはきかえるために、まず、そこへ飛び込んだ。その瞬間だったです。地下室の入り口がピカツと光った。同時に物すごい砂ぼこりで地下室は真っ暗、一寸先も見えんようになった。そこにどれくらいおったでしょうか。

手探りで、やっと外に出たとき、さっきまであった木造校舎もなんも、まわりの家もビルも、それこそなんもかもが、一瞬のうちに姿を消してしまつとつたです。

顔見知りの朝鮮人と出会つて

旅　　い　　長　　1
一体、何が起きたんか、さっぱり分からん。ただ、ものすごいことが起きたことだけはすぐに分かった。校庭には、真っ黒に焼けた死体がゴロゴロ転がつとつたです。わたしよりひと足先に学校へ着いたはずの二年生の弟を捜す気力も出んかった。地下から一歩外へ出たとたん、こりゃ、生きとるはずがない、と思つたです。

街全体がなんともいえん臭気で、なんべんも気を失いそうになりました。腹が裂けた男